

《本号の表紙絵》

渋江抽斎印章3種：右「奉朝請醫師兼醫學講官」・ 中央「弘前醫官澀江氏蔵書記」・左「弘前侍醫澀江道純平全善」

(渋江抽斎筆『(医学館講書被仰付候節) 御留守居方留書』(渋2) 表紙より採取,
公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵)

渋江抽斎(1805.12.28~1858.10.5, 名は全善, 通称は道純)は, 中国医学古典の文献考証をよくした江戸末期の江戸詰め弘前藩医であり, 森鷗外晩年の史伝(1916.1~5月新聞連載)によってその名が知られている。

僅かに残った渋江家資料は, 抽斎の五男で嗣子の渋江保(1851~1930, 名は成善, 号は羽化)によって昭和初期まで継承され, その後, 保の三女乙女に伝えられ, 乙女が嫁した青森県の佐藤家に近年まで伝存した(本誌55巻2号第110回日本医史学会抄録・松木明知「渋江家所蔵の史料と鷗外の「渋江抽斎」」). その後2009年に松木明知氏の仲介によって武田科学振興財団杏雨書屋に譲渡され, これを受けて杏雨書屋では同年4月に第52回特別展示会「渋江抽斎資料展」を開催して図録が作成され, また講演会も開催された(第23回研究講演会2009.4.25). この時に筆者は資料展示と図録作成に協力し, また松木明知氏とともに講演を行った(『杏雨』13号(2010)にその講演録収録).

ここに紹介する渋江抽斎の印章3種のうち, 中央の「弘前醫官澀江氏蔵書記」は鷗外が『武鑑』収集過程でこの蔵書印を捺した本にたびたび出逢い, 鷗外が抽斎に関心を持つ契機となったとして従来広く知られているものである(『渋江抽斎』その三). 右「奉朝請醫師兼醫學講官」と左「弘前侍醫澀江道純平全善」は, 印材に篆刻を施す以前の印稿として抽斎が朱筆で記しているものであり, この印の使用例はないから, この印章が製作されたかどうかは分からない(恐らく実際には製作されていないと推測される).

江戸医学館では天保14年に陪臣・町医の出席が許可され, 翌15年から抽斎は別会講師として毎月1・6の日に医学館に出講した(抽斎の没後この講座を鷗外の師として知られる佐藤元菫が継承する). 『御留守居方留書』は抽斎の医学館講師拜命時(天保15年1844)と將軍御目見時(嘉永2年1849)の二次における津軽藩江戸藩邸の留守居方の留書を抽斎が筆記したものである(『医学館講書一件記録』とともに松木明知『渋江抽斎の研究』1986年に活字収録). 医学館では講師勤続5年を経て將軍御目見を拜命することが定例化しており, 『御留守居方留書』の二次の記録が示すように, 抽斎もこの例にもれない。

「弘前侍醫澀江道純平全善」は津軽藩医を意味するものであり, 「奉朝請醫師兼醫學講官」は「御目見医師」兼「医学館講師」の意味であるから, この印稿が嘉永2年の將軍御目見以降に作成されたものであることが分かる. 『御留守居方留書』からは, 抽斎の医学館出講が津軽藩からも必ずしも歓迎されていなかったことも読み取れる. 同書の表紙で, 「奉朝請醫師兼醫學講官」の印が「弘前侍醫澀江道純平全善」の印の上位に記されていることは抽斎の秘かな思いを表しているのではないか. 抽斎にとって將軍御目見によって幕府の権威を帯びることは, 津軽藩の君臣関係から幾分か解き放たれることを意味したのかも知れない。

(町 泉寿郎)